

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370835

研究課題名(和文) 国家形成期におけるチベット・モンゴルの歴史・社会の総合的研究

研究課題名(英文) A comprehensive study on the history and society of Tibet and Mongolia during nation building

研究代表者

石濱 裕美子 (Ishihama, Yumiko)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：30221758

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：1905年にモンゴルに亡命したダライラマ13世の下に多くの巡礼が越境してつめかけるのを目撃したことにより、ハルハの王公とハルハの転生僧ジェブツンダンパ8世は転生僧の威力をしり、1911年にジェブツンダンパ8世を首班とするボグド・ハーン政権を誕生させるにいたった。ジェブツンダンパ8世は即位式、主権をダライラマ13世を模倣していた。

1913年のモンゴル・チベット条約は後世の条約に引用されなかったことから無効であるかのように言われてきたが、橋誠は小林亮介とともに同条約はチベット人の関係した紛争の調停に適用されていたことを示した。

研究成果の概要(英文)：Ishihama Yumiko revealed that the Qalqa-Mongol princes and the 8th Jibcundampa, the most famous incarnation lama in Mongolia had realized the great power of incarnation Lama by witnessing many cross-bordering pilgrims who rushed into Dalai Lama who had exiled to Mongolia in 1905 and this lead to form the Jibcundampa administration in 1911, when the 8th Jibcundampa imitated existing Dalai Lama's kingship and enthronement ceremony.

Tachibana Makoto found the sources which reveal that Tibet-Mongol Treaty in 1913, which was underestimated because of its lack of continuity to the subsequent treaties, was applied actually to mediate the conflict between Mongolian and Tibetan residing in Mongolia.

研究分野：チベット・モンゴル・満洲関係史

キーワード：チベット モンゴル チベット・モンゴル条約 ダライラマ13世 ジェブツンダンパ8世

1. 研究開始当初の背景

モンゴルがソ連の支配下にあった時代、人民革命が重視されたため、その直前において行われた王侯貴族と転生僧ジェブツンダンパ8世による1911年の清朝からの独立、つづくボグド・ハーン政権は過小評価されてきた。しかし、1993年にモンゴルが民主化し、史料の閲覧が自由化すると、ボグド・ハーン政権に関する研究は進み、1911年の政権成立はモンゴルの民族革命であるとの再評価が進んできている。

特に、モンゴル独立百周年の年にあたる2011年を中心にモンゴル独立をテーマとした様々なシンポジウムが開かれ、それに伴い *Монголын Тусгаар Тогтнол ба Монголчууд 2012, Улаанбаатар* を始めとする多くの研究書が出版された。ジェブツンダンパ8世についてもモンゴル科学アカデミーのバトサイハン氏(Батсайхан)による『モンゴル最後の聖ハーン、ジェブツンダンパ8世』(*Монголын Сүүлчийн Эзэн Хаан VIII Богд Жавзандамба, Монгол Улсын Шинжлэх Ухааны Акадэмийн Түүхийн Хүрээлэн*, 2009)という大著が発表されるなど、同時代史料を用いたボグド・ハーン政権研究は年々盛んになりつつある。

モンゴル共和国の研究者を中心に、モンゴル・ナショナリズムの影響を受けたボグド・ハーン研究が多数発表される一方、日本国内においては、ナショナリズムから距離をおいた、同時代文書史料を用いた事実確認型の研究、その代表的なものは橘誠『ボグド・ハーン政権の研究』(風間書房1911)の大著がある。本書においてはボグド・ハーン(ジェブツンダンパ8世)がモンゴル諸集団に新しい国への参加を呼びかけたにもかかわらず、南モンゴル諸部は必ずしも積極的に参加する姿勢を示さなかったこと、などを明らかにした。

以上のようなモンゴル内外の研究に共通した弱点としてチベット仏教文化に対する目配りがなされた研究が極めて数少ないこと、存在してもまだ発展途上の論稿が多いことがあげられる。

唯一の例外としては、2011年にチベット・モンゴル条約をめぐる国際会議がウランバートルで開かれ、チベット・モンゴル学者が協力して近代史を検証する試みが初めてなされたことである。

チベット・モンゴル条約はソ連が存在していた時代には存在すら疑問視されていたものの、2007年に条約の原本がウランバートルで再発見されたことをうけて、チベット史の研究者であるインディアナ大学の Elliot Sperlling 教授の呼びかけにより実現したも

のである。

この会議の成果は2013年、条約のチベット文・モンゴ文テキストとともに *The Centennial of the Tibeto-Mongol Treaty: 1913-2013* (Lungta 17, Amnye Machen Institute)として出版された。モンゴル・チベット条約というわずか一つの歴史的事象に関する出来事とはいえ、チベット学者とモンゴル学者が連携した画期的な研究と言える。

一方、チベットのダライラマ13世の事績や時代の研究については、現在チベットが国として存在していないこともあり、その重要性に比して研究は低調である。ダライラマ13世の著作集についての研究が、浅井万友美氏によって着手されているが、完結を見ていない。わずかに、小林亮介氏の論稿「辛亥革命期のチベット」(辛亥革命百周年記念論集編集委員会『総合研究 辛亥革命』岩波書店2011)が、大英図書館に所蔵されるダライラマの書簡などをもとにダライラマ13世の当事者意識を研究している。

2. 研究の目的

1911年、ハルハ・モンゴルの王侯は転生僧ジェブツンダンパ8世を国王に推戴し、清朝からの独立を宣言し、チベットにおいては1913年ダライラマ13世が清朝の関係を絶つことを宣言した。この二つの政権はいずれも転生僧が国王となり、仏教思想が優越する封建的な社会であったため、宗教を軽視する社会主義政権下においては批判対象となり、民主化以後もナショナリズムに有用な部分、近代化や国際関係といった分野の研究以外は踏み込んだ研究はなされてこなかった。

本研究においてはチベット仏教思想に対する理解を踏まえた上で、両政権の交流の様相を具体的に把握し、さらに従来はチベットはチベット、モンゴルはモンゴルと個別に行われていたチベット・モンゴルの近代史を、チベット仏教世界というより大きな視点からとらえなおすことを目的とする。

さらにいえば、現在の政治状況を過去に投影するのではなく、当時の文脈の中でジェブツンダンパ8世とダライラマ13世の王権観、歴史認識、チベット・モンゴル条約への対応などの解明することを目的とする。

3. 研究の方法

チベット・モンゴル双方が関係した事案、「ダライラマ13世のモンゴル滞在」「蒙蔵条約締結」などのテーマについては、石濱裕美子、橘誠、小林亮介三者が協力して解明にあたる。

石濱はまずチベット語で記されたダライ

ラマ 13 世とジェブツンダンパ 8 世の著作を文献学的に整理した後、そこに見られる歴史認識や王権観を難解な箇所をギユメ僧院長口サンテレ師等をインフォーマントとして明らかにする。

橘誠は初年度はボグド・ハーン政権期に成立したパトオチルの年代記の解読と出版への作業の傍ら、ボグド・ハーン期の歴史認識を明らかにする役割を担う。さらに次年度以後は「モンゴル国立中央文書館」、「モンゴル外務省文書館」、「モンゴル国立図書館」、台湾の「中央研究院近代史研究所档案館」などに所蔵するボグド・ハーン期の資料よりジェブツンダンパ 8 世の歴史認識を探る。

小林亮介はシムラ会議資料や大英図書館に所蔵されるチベットとイギリスの外交関連資料より、ダライラマ 13 世の領土観、国家観について明らかにする。最後に、シムラ会議やチベットの独立宣言などのチベットに関する問題については石濱と小林が協力し、モンゴルの歴史書とチベット史料の研究については石濱と橘が協力して検証する。

4. 研究成果

26 年度の成果

石濱裕美子(研究代表者)はインドカルナタカ州にあるチベット密教の大本山ギユメ大僧院、ガンデン大僧院などにおいて参与観察を行いチベットの僧院組織と転生相統制について調査した。日本モンゴル秋期大会では、1911 年にモンゴルが独立を宣言シジェブツンダンパ 8 世が国王として即位した際、そこで読まれた祝詞において、ジェブツンダンパ 8 世はダライラマと同じの王権像で言祝がれていたことを指摘した。また、石濱と小林亮介(研究協力者)はダライラマ 14 世の即位式にたちあったイギリス人グールドの本国政府への報告書の訳註を行い、ダライラマに政権に対するイギリス側の認識を明らかにし、本資料とそのチベット語訳から抹消されている部分をあぶりだすことによって、チベット人がイギリス人の認識のどの部分を受け入れ難かったかを明らかにした。

橘誠(研究分担者)はモンゴルの首都ウランバートルの国立図書館においてで第一次世界大戦期にモンゴルの民族自決についての意識がすでに存在していたことを示す史料を発見し、

小林は大英図書館でダライラマ 13 世のイギリス国下への書簡を、Newark Museum で Cutting のダライラマ 14 世への書簡を発見・調査した。さらに「独立」「自治」「宗主権」という近代的な概念が、モンゴル語とチベット語でどのように翻訳され、どの程度までそ

の内容が理解されていたかについて論考を発表した。

総じて、三人とも本テーマに関連した資料探索に主軸をおき、一方では学術論文と研究発表を非常に生産的に行った一年であった。

27 年度の成果

石濱裕美子は 20 世紀初頭に中央アジアから東チベットを探検したフィンランドのマンネルヘイム男爵の撮影した写真をヘルシンキの国立博物館において探索し、さらに 1905 年にダライラマ 13 世とイフ・フレ(現ウランバートル)で会合したロシアのコズロフの将来品をペテルブルグのエルミタージュなどで閲覧した。

橘誠はモンゴル共和国首都ウランバートルにおいて引き続きチベット語・モンゴル語資料探索を行い、小林亮介(研究協力者)はアメリカにおいて 20 世紀初頭にダライラマ 13 世と交流のあった Rockhill の文書を探索した。橘誠がウランバートルで発見したチベット語文書を、チベット語が口語・文語ともに堪能な小林が解読し、その逆、すなわち小林が大英図書館でみいだしたモンゴル語資料(クルク貝子文書)をモンゴル語が堪能な橘が解読するといった形で研究は非常に効率よく進行した。

従来、20 世紀初頭のチベット、モンゴル史は、チベットはイギリスと清朝、モンゴルはロシアと清朝との関係から考察されても、チベットとモンゴルの関係については等閑視されてきた。しかし、今回三者が協力しあって行った研究を総合すると、20 世紀初頭のチベット・モンゴルの関係は、王権像、商業、巡礼などを通じてはるかに密接に関連しあっていたことがわかった。

これらの研究成果を一般に共有すべく 2016 年 3 月 12 日に中央ユーラシア歴史文化研究所主催のシンポジウムで橘、小林が発表し、石濱がコメンテーターを務めた。また、橘、小林は New York の Vassar College において開催された Conference on Asian Studies で前者はモンゴルの、後者はチベットにおける「自治」「独立」「宗主権」の概念の消化の仕方を発表し研究成果の海外への伝達を行った。

28 年度の成果

石濱裕美子(研究代表者)は 26 年度に行ったギユメ大僧院、ガンデン大僧院において行った参与観察の成果を踏まえて、チベット・モンゴルにおいて一世を風靡した転生相統制度が、仏法の継承という主な目的以外にも、前代の財産、施主、子、側近たちの当代への

継承という社会的機能があることを示す図書を公表した(『ダライ・ラマと転生』)。また、フランスを代表する東洋学の雑誌の一つ *Cahiers d'Extrême-Asie* において 17 世紀におけるダライラマ制の成立過程について論考を公表した。さらに、3 月にはピョートル・コズロフが 1905 年にダライラマ 13 世滞在中のイフ・フレー(現ウランバートル)において撮影した写真をロシア地理学協会において探索し、当時ダライラマ 13 世の下を訪れていたモンゴル人巡礼者たちの写真、特に南モンゴルのシリングル盟長の写真などを発見した。

橘誠(研究分担者)はボグド・ハーン政権の歴史認識を示すバトオチルの年代記(モンゴル国立図書館所蔵)の出版を行い、かつ、後世国際条約に引用されなかったことから無力であるかのように言われてきた 1913 年締結のモンゴル・チベット条約は、同時代のチベット人・モンゴル人間でおきる紛争の調停に実際適用されていたことを示す資料をウランバートルの文書館で発見した。

研究協力者の小林亮介は大英図書館などに所蔵される 20 世紀初頭のチベット語の書簡などを用いて、中国軍がチベットから撤退し、ダライラマ 13 世がチベットに帰還した 1913 年、ダライラマ 13 世は各国に使節をおくり様々な形で独立をアピールする外交を繰り広げていたことを論文に示した。

2017 年 3 月には研究代表者がホストとなり、Kreddha Foundation 共催で早稲田大学において国際会議を開催し、この三年の研究でえられた新知見に基づくチベット・モンゴル・清朝関係史をプレゼンテーションした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

【雑誌論文】(計 15 件)

(1) 橘誠「清朝崩壊後のモンゴル・チベット関係—蒙蔵条約の同時代的意義に着目して」『中見立夫教授退官記念論集』遼寧民族出版社, 2017.3 (予定) 査読無

(2) 石濱裕美子他(チベット文献講読会)「ダライラマ政権初期のチベット執政者の印璽に関する基礎研究」『史滴』38, 2016: 148-180 査読無

(3) KOBAYASHI Ryosuke, “The Lungshar Delegation and Britain in 1913: Focusing on the Letters of the 13th Dalai Lama.” *Inner Asia*, No. 18, 2016: 288-308. 査読無

(4) KOBAYASHI Ryosuke “Agvan Dorzhiev (1854-1938),” *The Treasury of Lives: A Biographical Encyclopedia of Tibet, Inner Asia, and the Himalaya*, <http://www.treasuryoflives.org>. The Shelley & Donald Rubin Foundation, February 2016. 査読無

(5) ISHIHAMA Yumiko *The Dalai Lama as the cakravartī-rāja as Manifested by the Bodhisatva Avalokiteśvara.* *Cahiers d'Extrême-Asie*, 24, 2015 169-18 査読有

(6) 石濱裕美子「ジェブツンダンパ 8 世の王権像について—ダライ・ラマとの比較から—」『史滴』37, 2015: 82-106 査読有

(7) 石濱裕美子他(チベット文献講読会)「ダライラマ 14 世の探索、認定、即位に関する報告書」訳注(下) 査読無『史滴』37, 2015: 195-219 査読無

(8) 石濱裕美子「マンネルヘイムのアジア旅行日記から見るチベット仏教徒の動向について」『内陸アジア史研究』31, 2015: 145-163 査読有

(9) 橘誠「モンゴルの国史編纂と翻訳文献：Ch.バトオチル抄訳『通鑑』・『綱目』について」『下関市立大学論集』59-1, 2015: 93-103 査読無

(10) 小林亮介「試論 18 世紀後期清朝対康区政策的変化」『藏学学刊』10, 2015 査読無.

(11) 石濱裕美子・小林亮介他「ダライラマ 14 世の探索、認定、即位に関する報告書」訳注(上) 査読無『史滴』36, 2014: 171-185 査読無

(12) 橘誠「モンゴル独立をめぐる翻訳概念自治か、独立か」岡本隆司編『宗主権の世界史』名古屋大学出版会 2014: 234-261 査読無

(13) 橘誠「あるモンゴル王公の末裔との出会い」『近現代東北アジア地域史研究会 NEWS LETTER』26, 2014: 63-68 査読無

(14) 小林亮介「チベットの政治的地位とシムラ会議 翻訳概念の検討を中心に」岡本隆司編『宗主権の世界史』名古屋大学出版会 2014: 262-290 査読無

(15) 小林亮介「プンツォク・ワンギェル」村田雄次郎等編『東アジアの知識人⑤』有志舎 2014: 352-368 査読無

【学会発表】(計 14 件)

(1) ISHIHAMA Yumiko, "Qing Emperors as Cakravartin Raja incarnated by the Bodhisattva Manjusri," Kreddha Foundation・中央ユーラシア歴史文化研究所 共催 "The Nature of Inner and East Asian Politics and Inter-polity Relations in the 18th and 19th centuries, focusing on Qing-Tibetan-Mongol relations; Perspectives from Contemporary Sources." 早稲田大学 2017年3月6日(月)

(2) 橘誠「清朝崩壊後のモンゴル・チベット関係：蒙蔵条約とその後」私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏」・早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所共催シンポジウム「通商・巡礼・亡命：17～20世紀初頭の中央ユーラシアにおける超境界活動」早稲田大学 2016年3月12日

(3) KOBAYASHI Ryosuke, "Independence or 'Autonomy'?: Translated Concepts in Tibet at the Beginning of the 20th Century," The 60th Anniversary Symposium of Fairbank Center for Chinese Studies, Harvard University, October 7th, 2016.

(4) KOBAYASHI Ryosuke, "The Exile and Diplomacy of the 13th Dalai Lama (1904-1912): Tibet's Encounters with the US and Japan," Harvard University, November 29th, 2016.

(5) Ryosuke Kobayashi. "Independence or Autonomy? : Translated Concepts in Modern Tibet," Diplomatic (Mis)translation and Empire: Misreading and Manipulation in Sino-British Dealing with Tibet, The Lecture Series of Modern Tibetan Studies Program, International Affairs Building (918), Columbia University, New York, February 2, 2016.

(6) 小林亮介「ダライラマ 13世の亡命と外交(1904-1912): W.W. Rockhillとの往復書簡の検討を中心に」私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「近代日本の人文学と東アジア文化圏」・早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所共催シンポジウム「通商・巡礼・亡命：17～20世紀初頭の中央ユーラシアにおける超境界活動」早稲田大学 2016年3月12日

(7) 石濱裕美子「ダライラマ 13世のモンゴル・青海行がモンゴル独立に与えた影響について---チベット、モンゴルの近代「国家」生成の現場-」東北アジア地域研究の新たなパラダイム(東北大学東北アジア研究センター創設 20周年記念式典・講演会・国際シンポジ

ウム) 於仙台国際センター 2015年12月6日

(8) Tachibana Makoto, "Between Independence and Autonomy: Translated Concepts in Modern Mongolia," New York Conference on Asian Studies, Vassar College, 2015.10.17

(9) Ryosuke Kobayashi. "The Political Status of Tibet and the Simla Conference, 1913-1914: Focusing on the Translated Concepts," in Panel Session D: Contested Concepts and East Asia After the Sinosphere: Chinese Suzerainty, Tibetan Autonomy, Mongolian Independence and Korean Sovereignty, New York Conference on Asian Studies, New York, Vassar College, October 17th 2015.

(10) 石濱裕美子「ボグド・ハーンの王権像について」日本モンゴル学会 2014年度秋季大会 於岡山大学農学部 2014年11月15日

(11) TACHIBANA Makoto "Between the Personal and Territorial Principles: The Ruling System of Mongolia in the Early 20th Century," The International Institute for Asian Studies international conference, Ulaanbaatar, August 9th 2014

(12) 橘誠「モンゴル国史の起源 -アマル著『モンゴル略史』とバトオチル著『モンゴル国の古来継承を略記した書』」, 平成26年度九州史学会大会,九州大学,2014年12月14日

(13) 橘誠「第一次世界大戦とモンゴル -民族自決主義を中心に」国際ワークショップ『第一次世界大戦と東アジア』, 京都大学, 2014年2月22日

(14) KOBAYASHI Ryosuke "The Lungshar Delegation and Britain in 1913: Focusing on the letters of the 13th Dalai Lama", Tibetan Culture, Literature, and Society, Harvard University, May 12th 201

(図書)(計1件)

(1) 石濱 裕美子『ダライ・ラマと転生』扶桑社新書 2016

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

石濱 裕美子 (ISHIHAMA, Yumiko)
早稲田大学・教育総合科学学術院・教授
研究者番号：30221758

(2)研究分担者

橘 誠 (TACHIBANA, Makoto)
下関市立大学・経済学部・准教授
研究者番号：30647938

(3)連携研究者

()
研究者番号：

(4)研究協力者

小林 亮介 (KOBAYASHI, RYOSUKE)